

# 家庭科の男女共修をすすめる会

ニ  
ユ  
ー  
ス  
16  
11

発行日 51. 8. 3

連絡先

東京都渋谷区代々木2-21-11

一部 50円

婦選会館内

TEL 03-370-0238

「女の子の未来と家庭科」  
「女の子」という時、どの位の年令  
を想像するだろうか。私は、今日、  
言葉どおり、女の子幼稚園児ぐら  
いを対象として話したいが、職場で  
用いられる「女の子」という言葉も

報告者 樋口恵子氏(評論家)

日時 六月十九日(土)PM1:30  
〜PM4:30

テーマ

第十二回『家庭科の男女共修をすすめる会』集会報告

- ☆第十二回『家庭科の男女共修をすすめる会』集会報告
- ★テーマ「女の子の未来と家庭科」
- ☆シンポジウム「家庭科はいつまで女だけ」のお知らせ(諸団体と共催)……………(6)
- ☆国会での質疑から 家庭科の男女共修をめぐって……………(6)
- ☆志熊氏・小笠原氏のらりくらりと核心にふれず……………(7)
- ☆国内行動計画概要での家庭科の取扱い 婦人問題企画推進本部……………(8)
- ☆仙波千代さん、岡村喜美さんと電話でお話しました……………(9)
- ☆家庭科教育学会第十九回大会……………(9)
- ☆都高教教研六月集会報告……………(9)
- ☆「家庭科は誰にも必要」説得しよう……………(10)
- ☆日誌メモ……………(11)

次回会合のお知らせ  
『第13回討論集会』

テーマ 「子どもの発達と家庭科教育」  
講師 千葉大学教授 城丸章夫氏  
参加費 200円  
日時 9月18日(土) P.m.1:30  
〜P.m.4:40  
場所 婦選会館  
渋谷区代々木2-21-11  
TEL 03-370-0238

問題にしたい。四十にもなっている女性に「うちの女の子に取りにやらせる」という言葉を使って、なんとも思わない。そのうちに女性自らも「女の子」と呼ばれることに不思議を感じなくなり、氏名を尋ねても、「総務課の女の子と言って下さればわかる」などと答える。かつて「子供さん」と呼ばれて使い走りをしていた少年の仕事が女性の仕事となり、同時に「女の子」という言葉を定着させたのである。

「未来」ということでは、まさに我々の未来の姿である「老後」に焦点をあてて、いっしょに考えてみたい。

### 1. 幼稚園児の実態から

八年前、私は東京の白金幼稚園に毎週通って、幼児集団を観察した。そこで見たものは、まさにおとなの男・女集団をそのまま小さくした姿であった。砂場遊びにしても、男の子は群をなして機能集団を作るが、女の子は砂場の中心に背を向けずらりと横に並んで、おだんごを一人で

作る。同じものを見た反応も男の子は客観的、女の子は主観的・情緒的で、四歳にしてこども達うのかと思うほどであった。また、女の子の中にも、男の子たちにモテる子、モテない子があり、そのタイプの違いを如実に見せつけられて唖然とした。だが、幼児が白紙だと思うのは間違いで、生まれた瞬間からの環境の刺激によって、一方的に家庭環境の濃密汚染を受けてきている。八年

前昭和四十三年といえ、高度経済成長のまっただ中であつた時で、まだ豊かな社会の幻想が生きている時であつた。この白金幼稚園児の母親百人を対象にアンケート調査を行つてみたのである。すると想像以上に男の子・女の子という意識を持つて育てていることがわかつた。

### 2. 幼稚園児を持つ母親の意識から

たとえば、すなおさ・誠実さ・やさしさなど八つの美德をあげ、子供に何を望むかを調べたところ、男の子に対しては、たくましさ・誠実さ・

積極性、女の子に対しては、素直さ・やさしさ・聡明さがベスト3であつた。そして男の子には「仕事の上で能力を大いに発揮してほしい」、女の子には「明るく楽しい家庭を築いてほしい」と願っている。また、「男女を意識した、しつけをしたことがあるか」に対して80%が「ある」と答えている。

「男のくせに、男だから」と言うのは圧倒的に泣いた時、次いで臆病、ぐず。「女のくせに、女だから」と言うのは、言葉づかいや行儀が悪い時に集中している。口答えした時も女だけが叱られている。泣くことを禁じられて育つ男、泣くことで許される女、ととらえることができそうだ。

ここ一、二年婦人解放や日常の性別役割分担意識を新たに考え直すとする動きが高まつた。高度成長への反省も出た。この時点で今の母親はどうか、八年前と同じ質問をしてみた。(白金幼稚園の調査はまだまとまっていけないので、

鶴川の和光第二幼稚園で行つた結果である)

男の子に望む美德は、積極性・誠実さ・次いで素直さが入り、たくましさが続く。八年前になかつた素直さが登場したのは、男の子のしつけに母親が手を焼いているからか？女の子には、やさしさ・聡明さに次いで素直さと積極性が同位であつた。男の子の将来に「仕事の上で能力を」望むことは同じだが、三位であつた「明るく楽しい家庭」に次いで「仕事に能力」が望まれている。叱り方は、女のくせにと言つて叱つたことのあるもの、ないものが半々となり、八年前よりも「女のくせに、女だから」と言わないようにしている。男の子が叱られるのは、メソメソ泣く、グズグズして決断をはっきりしない時であるが、女の子はやはり言葉づかい・行儀で、女の子は決断を迫られる場から常に逃げていられることがわかる。

八年前にはなかつた問いとして家庭科男女共修に対する賛否を尋ねた

ところ、圧倒的に賛成が多かつた(男の子の母45人中賛成33人反対2人、女の子の母30人中賛成25人反対3人、いづれに言えない2人)。

賛成の理由は「一人で独立した時に役に立つ」が半分。即ち性別分業を肯定しながら女の立場を理解するために、という考えだ。「家庭は男女生存の場だから」「万が一のことを考えて」「人間としてごくあたり前の能力」で残り半分を占めている。

### 3. 老婦人の問題

保谷市で行つた一人ぐらしの老人調査を見て、緊急に家庭科男女共修を行う必要があると思つた。老夫婦だけの暮らしで、夫が寝たきりとなり妻が介護している時は、夫の寿命は13年ある。ところが、妻が寝たきりで夫が介護している時は、妻は2年しか生きていない。つまり男はそれほど病人を介護する能力に乏しいのである。

また老人性痴呆にどちらがなりや

すいかを調査で見ると、おばあさんの方がずっと率が高い。これは常識とは反対だが、袖井孝子氏が行つた一九七二年の調査で見ると、老後にまで役割分担意識が及んでいるのがわかり、そのことが原因ではないかと思ふ(月刊「家庭科教育」増刊「みどり豊かな老後を考える」参照)。

即ち①「一日中で一番長時間している仕事」と②「生きがいを感じる仕事」を調べた。①と②が一致すれば人間は最もしあわせである。おばあさんの大部分は、①が家事で、②と一致している人はわずかしかなない。仕事には参加・創造・評価という三面があり、若い時は評価されなくても創造で満足できるが、年をとるほど参加・評価が大にならなると満足できないのではない。

東京都の百歳老人調査を見ると、生きのびるのは女4：男1の割合で身体的機能としては女が勝っているが、精神的機能は男18：女10



- 6 -



高校、小笠原ゆり・岡村喜美氏らによる「家庭一般の内容についての生徒の意識調査」で「男子の家庭科教育の必要性についてどのように考えているか」の項目を設けたところ「食生活の経営をのぞく領域に学習の必要性を認めていることがわかり、共修に改善すべきである」と報告されました。小笠原ゆり氏は文部省の担当官であり岡村喜美氏は新たに家庭科教育学会の会長として就任された方々ですが、こうした状況からいっても今回の教育課程改訂は男女共修実現の又とない好機ではないかと思われました。

以上の他、藤枝真子（横浜国立大）村尾勇之（静岡大）堀田剛吉（岐阜大）米川五郎（愛知教育大）内藤道子（山梨大）等の諸氏による共同研究「家庭科教育における消費者教育の構想」の発表も注目をあびました。網羅的な研究内容で敬服しましたが、現場教師としては「子どもの発達」との結合をどうするかという点で、埼玉県大宮西高の実践研究からより多く学ぶものがありました。（和田）

#### 都高教教研六月集会報告

家庭科分科会は、労音会館で19日全日をかけてもたれ、平日にもかかわらず都立約20高校が参加して、生徒の実態や授業実践の交流がおこなわれ成果がありました。

話し合われた主な事柄

「生徒たちの状況  
「温和しくなって授業はやり易くなったがどうも手応えがない」「以前のよう疑問や不満をのべなくなってきた」「教師に対して反発も減り、共感したり感動したりすることになった」といった意見や、「自分で考えるのが苦手なだけでなく、此頃は体や手足を動かすことも面倒がついて、ノートをとらない生徒が出てきて、何でもおぼえて見せなければ、言葉が通じなくなってきた」「とに角、何をすることも面倒といった様子が強まってきた」「等の嘆きが、主として山の手の普通高校から多く出されたのに対して、定時制や多摩などの辺地校からは「生徒はまだ素朴で、授業にものっている」「教師のとりくみによって規律なども正しくする」などの明る

い状況が出され、生徒たちの状況にはかなり学校・地域格差の大きいことがわかりました。

#### 三授業実践

実践報告が三つと教科論が一つ出されましたが、ここでは「男女共学・家庭一般」の授業実践二例にしばって紹介しましょう。

その一「家族をどう教えたか」  
齊藤弘子（農林高校全日制）

この学校では、農業・家政の五学科でミックスホームルームを編成し、授業一般・家庭一般をとともに全員必修として既に三年目をむかえています。誰でもできる男女共学をモットーとして、六人の家庭教師全員が日常的な協議を続けながら授業を仕組んできました。そのなかで「家族」は生徒たちに定着しにくい領域で苦心しています。内容は「家族の機能・現代家族の問題点・家族の歴史・民法のうづりかわり・家事労働と職業労働余暇」で16時間をあて、学年の最初においているといえます。生徒たちの興味は男女共に食物、子どもに次いで家族にあります。抽象的な内容なので①衣食住②家計③子ども④家族の順に配置した方がよいのではないか、というのが参加者多数の意見として出されていました。また、全校あげての共学の取組みは高く評

価されました。

その二「性をどうとらえ、どう実践したか」時得様子（大島高校全日制）  
島の青年たちにも及んできている性的な退廃を受けとめ「これにメスを入れ、生活を見つめ直す」「正しい性知識を与える」「性の歴史的な見方を学ぶ」「生命誕生のしくみと生命の尊さを知る」ことをねらって、①性の歴史②妊娠・出産とその異常③スライドアニ出版（こにちは結婚）④婚姻法を13時間をあてて教え、学習のまとめとして「自分の生育史」をつづらせたという実践です。

学習を卒えた生徒の感想は

- ・生命の尊さと生きることの大事さ
- ・出産の神秘・母親の偉大さ・強さ
- ・生命をかけた母親を裏切ってはならぬ

- ・子殺し・子捨てに対する強い怒り
- ・生きる権利・つらい事をのり越える力
- ・生命を生み出す責任・女のほこり

などが解ったというものでした。また、スライドの評判がよく教材として有効なことが報告されました。

参加者の多くは、共学の実践者や来年から始めようという学校が多かった。で、これらの実践は大きな励ましと見通しを与えました。

（和田）

#### 「家庭科は誰にも必要」

説得しましょう！

理念としては共修に賛成でありながら、共修運動については、まだまだ消極的な方が多いようです。

「高校での共通必修が今すぐ認められる筈はないのだから、必修を守るために女子必修を推進した方がよい」「中学での家庭科の時間減を防ぐ為に、共修にしない方がよい」「今すぐ共修にしても、十分な内容の授業はできない」という声をよく耳にします。

けれども、世の中は動いているのです。男女の役割が見直されようとしている今、女子だけの家庭科を続けようとするなら、家庭科への反感を強めることになってしまいうでしょう。

今、家庭科にとって最も必要なことは、女子教科のイメージを払拭し、人間にとって基本的に大切なことを扱う教科だという認識をひろめることではないでしょうか。

困難はあってもそれを乗り越えて共修を進める他に、家庭科の生きる道にないのだと、消極的な方々を是非説得しましょう。

（梶谷）

#### 日誌メモ

|       |  |
|-------|--|
| *4:8  | 発起人会<br>ニュース10号発送（市川房枝さん封筒ノリ付）                                 |
| *4:30 | 同日市川議員国会で「家庭科問題」永井文部大臣に質問（6頁参照）                                |
| *5:20 | 資料「家庭一般」長野県高等学校教育文化会議教育研究会編送られる（法規文化社刊）                        |
| *6:7  | 発起人会<br>浦和第一女子高校の二人が高校新聞で共修をとり上げたいと来館                          |
| *6:8  | 討論集会「女の子の未来と家庭科」   |
| *6:19 | 「国際婦人年をきつかけとして行動を起こす会」主催の「国内行動計画草案討論会」で久保田真苗室長に家庭科について質疑（8頁参照） |
| *7:16 | 家庭科の男女共修をめぐる一問一答千部、実践資料を五百部三版出す。                               |
| *7:22 | 発起人会、9月日シンポジウムについての打合わせ他                                       |
| *7:26 | NGO主催、国内行動計画に対して要望する会参加（塚本・中島）                                 |